みんなで協力することの大切さ

足羽第一中学校　三年　藤田（ふじた）　桃華（ももか）

七月十三日木曜日午前五時三十分。私はスマートフォンの大雨による土砂災害の危険を知らせる緊急速報メールの音で目が覚めました。夜寝る前に大雨の情報は聞いていましたが、大したことないだろうと特に気にすることはなく、普通に布団に入りました。一度眠ると滅多に目が覚めることがないので夜中に雨が激しく降ろうが雷が鳴ろうが、気づくことなく熟睡していました。実際私の住む福井市の東郷地区は浸水や土砂崩れの被害はなくその日も一時間登校時間が遅くなっただけで私の七月十三日は日常とたいてい変わらない一日でした。

夕方のニュースで、各地の被害状況や過去の福井豪雨の映像が流れても、「被害に会った地域や被災した人は大変だなあ」と思っていたら、母が福井豪雨の映像を見ながら、十九年前の体験を話し始めました。

20×20

当時母は結婚前で実家の鯖江市の東部に住んでいました。その日は仕事で朝から雨が激しく降るから運転が危ないと思いながら市街地にある職場に車で向かったそうです。職場付近は雨が激しいもののさほど危機感もなく通常通り仕事をしていたら、家から電話があり「浸水しそうだから早めに帰らせてもらいなさい」とのことで上司に早退を申し出ている五分もしないうちに再度連絡が入り「辺り一面浸水し、道路も分からない、家の中にも水が入ってきて危ないから帰らず、そっちが安全なら待機させてもらいなさい」そのような連絡をもらった母は心配でたまらなくなり帰らせてもらい、車で帰路についたそうです。

家に帰りたくても、アンダーパスは水たまり、至るところで用水路があふれ、道路が水たまりになって通れない。何とか走れる道を迂回し、近くの川にかかる道への坂を登った時、坂の上から見た光景は目を疑う辺り一面泥水に浸った町内一帯だったそうです。

20×20

屋根の上で救助を待つ平屋の人達、救命ボートに乗る人。一階の半分まで水に浸かり、田園地帯に家が並ぶのどかな一帯がテレビで見たことがある被害地に変わっていたそうです。

母の実家は裏に川が流れていて、その川は氾濫はなかったそうですが、他の川から越水したたくさんの雨水が流れ込み裏の川の堤防により、停電し雨が止んでも水がなかなか引かなかったそうです。腰まで泥水に浸りながら家にたどりついた母は床上浸水した生まれ育った我が家に言葉を失ったそうです。

それから水没した家具、電化製品の後始末など途方にくれるくらいやることが山積みでどうしようか家族で気をもんでいたそうですが、親戚をはじめ友人や同僚、ボランティアの人達が次々とかけつけて、暑い中泥のかき出しや使えなくなった家財道具の処理など汚なくてきつい作業でも嫌がらず、時間を惜しまず後始末を手伝ってくれたそうです。

私は、虫が苦手なので外での作業は嫌いで

20×20

す。暑いのも嫌だし、汚れるのも嫌です。けれど、実際身近な人が困っていたらそんな小さな苦手は気にせず動かなくてはいけないと思いました。

水が引いても元通りになる訳ではなく、水害は怖いと思いました。実際ニュースなどの報道から得る情報からでは被害のごく一部にすぎず、被災した人は水に浸ったその日だけでなく、人の手による後始末、壊れた家屋や道路の修理、次に同じような大雨が降った時に被害が起きないような河川や堤防の改良が終わるまで水害が終わったとは言えないのだと実際に被災した母が言っていました。

私は中学生の今、明日被災したら何が出来るだろうと考えました。今の私は避難所が公民館なのか小学校なのかさえ分かっていませんでした。家族と一緒に行動すればいい、言われた指示に従えばいいと気楽に考えていました。山も近くにないから土砂崩れに巻き込まれることもないだろうし、川も遠いから浸

20×20

水もないだろう、自分が被災することはないだろうと他人事のように考えていました。

母の体験を聞いて、中学生だからという甘い考えでは災害は乗り越えられないと思いました。私も母の実家の復旧を助けた周りの人達のように、知人だけでなく被災して困った人を助けられる人、自分で動ける人にならなければならないと思いました。災害を起こさないようにはできないけれど、災害が起きた時、困ったことがあっても乗り越えられる準備、自分だけではなく、周りの人も守り助ける行動ができるよう今から考え身につけていきたいと思いました。

20×20